

ヒトの子



久米 又三

○

自分の子どもにもそうだったが、孫たちが生まれたときも、同じようにそうだった。孫たちと、自分の子どもとの間には、三十何年かの月日のへだたりがあるが、それでも、生まれたての赤ん坊に、お湯をつかわしてやるたのしみだけは、たのしんでみたくて、離れて住んでいる孫のところに、暇をつくっては通ってや

った。
なにがそんなにたのしいのかと問われても困るが、湯浴みしているあいだの赤ん坊の姿が、いかにも天衣無縫なのが、私

の心をなごやかにしてくれるのである。

『人の悟りをうる、水に月のやどるが如し、月はぬれず水はやぶれず』とは、道元の言葉ときいたが、ここでは、赤ん坊のからだはぬれて、水はとつくにやぶれているけれども、赤ん坊の天衣無縫さは、白ずと大自然の安らかさに通ずるものがあって、私はタゴールといっしょに、この存在は、神が人間を見放していない知らせであると、いいたいのである。

○

なにがもて、ヒトの子は、このよう

に天衣無縫なのであろうか。

考えてみると、ヒトの子の誕生という事件は、生物学的にみると、びっくりするほど大胆な事柄に属する。これは遠い遠いヒトの祖先動物が、四億年もまえに、水中から地上へ上陸した試みに匹敵すること、おそらく系統発生的な反復であると思う。進化学者が口をそろえて言うところによると、生物の進化は、無方向な突然変異と、環境による淘汰のたえない繰り返りかえしによっている。化石による証拠をもとにしてみると、ヒトの祖先動物がはじめて上陸してから、ヒトが属する哺乳類が現われるまでに、ざっと二億年しかかっている。億をこえる数字は、われわれにとっては無限大の方に近く感ぜられて、はたして無方向な突然変異と、環境による淘汰の繰り返りかえしで、こんな立派なもろの生物がつくられるものかどうか、判断に迷うほどである。しかし、変化はきわめて徐々であっ

たにちがいない。

それに比べると、ヒトの子がやりとげる上陸反復は、準備はせいぜい九ヶ月の短期である。そのあいだに、遺伝因子のなかにおさめられた過去何億年の経験にしたがって、上陸の日に備えて準備がととのえられる。まず、からだを包む外皮が、あたかも宇宙服を着るように、層を重ねて強靱さを増したし、不完全ながら自動温度調節器も用意されたし、血液のなかには空気呼吸用のヘモグロビンへの積みかえも準備されたし、母体を脱出すると、一瞬にして始動するはずの横隔膜の筋肉運動もテスト済みではある。しかし、いよいよ外氣中に突入してみても、用意された器官のはたらきは満足であつても、外氣での生活に対する適応の戦いはつづけられる。

この戦いの一休みのために、赤ん坊は天衣無縫になれるのであろうか。

○

自然は淘汰にはげみ、生物は適応にはげむ。そして、この繰り返えしで進化はすすむ。淘汰のフルイに落ちたものは絶滅し、フルイに残ったものは生きのびる。生きのびるためには、淘汰のフルイの及ばないところで生活することもできる。生物のなかには、『生きた化石』とよばれて、何億年のあいだ、少しも形を変えないで生きのびているものもある。東京湾沿いの泥地帯で、泥のなかにすんでいるシャミセンガイもその一つである。泥にもぐって何億年、同じような物を食べ、かすかに呼吸し、夏になると卵を産むだけで、どういう意味があるのかと感ずるが、これも一つの生き方なのであろう。

しかし、たいいていの生物は、環境の条件が変化すれば、それにつれて変化する。

そして適応は漸進する。適応は、現在の生活を有利にはするが、未来の生活を保証するとは限らない。適応がすすん

で、いわゆる特殊進化の姿をとってくと、適応も限度にきて、それ以上の変化に耐えられなくなる。このような、環境条件の変化がおこると、その生物は生きながらえらることを絶つて、系統死をとげることになる。系統死をとげた動物は、ふたたびこの世に姿を現わすことがない。

化石をたどってみると、肉切歯のちょっとした位置のちがいで、一方は生きのこり、他方は死滅した例もあるし、南北両アメリカ大陸が陸つづきになったため、弱い南アメリカの動物が強い北アメリカの動物どもによって、たちまち亡ぼされた例もある。またある化石は、寄生虫やその他の伝染病で絶滅したと思える場合もある。しかし、総じて、特殊進化によって進化の袋小路に追いやられたと判断される例が多い。

○

これに比べると、ヒト類がたどってきた道は、余りぱっとしないが、結果から

みると幸いな道であった。ヒト類の進化は特殊化を避けながら、しかも進化の道をたどっている。このようなことが、どのようにして可能なのであろうか。

まず最初に考えられることは、出発点となったヒト類の、祖先動物がよかつたのである。この動物は決してエリートではなく、きわめて平凡で一般的な動物であった。しかし、雑食性であったことが、生活圏を広める可能性をのこしているし、樹上性であることが、原始的な五本指そのままに、物を把握する力をあたえた。これが、ヒト類の直立で二足歩行と大脳のいちじるしい発展にむすびついた。

ヒト類の進化を特徴づけるもう一つのこととは、進化の過程に、ネオテニー（幼形進化）の方法をとり入れたことである。この方法は、幼形がそのまま成熟して親の形になるので、ここでは前の親の形は省略される。従って、この方法を採用すると、多分に特殊化して、種の存続を危

険にさらすおそれのある親時代を排除しながら進化する可能性がある。ネオテニーは一種の發育遲滞現象とみてよい。ほかの動物にも、専門的には興味のある例がしばしばあるが、ヒト類がネオテニーをおこしている証拠はなんであらうか。

ホルクによると、ヒト類と類人猿とを比べると類人猿の胎児の特徴が、ヒト類では、親時代になってはじめて出現するものが多いという。皮膚の色があわいこと、からだに毛が乏しいこと、歯の出現が非常に遅いこと、頭骨の縫合が遅くまでしっかりしないこと、顔面が扁平なこと等々である。細かい説明をばぶくが、頭骨の縫合が、いつまでもゆるやかなことが、脳の成長をゆるしているし、からだが無毛で、歯の発達がおそいことは、親からの保護を要求している。ヒトの子の発達は、まことに微妙であるといつてよい。

○

特殊進化をとげた動物と、これをできるだけ避けるようにして進化してきた動物とは、この世での実際の生活に、どのような違いが出ているのであろうか。特殊進化をとげた動物で、現在、もっとも繁栄しているものの代表は、なんといっても昆虫類である。これに対して、特殊進化を避けながら進化したもので、しかも同じく繁栄しているのは、われわれヒト類である。この二つの類は、奇妙なことであるが、いろいろな点で実に対照的な動物である。からだの組み立てもそうであるが、生活の仕方もそうであり、現在、この世の中で、互いにその生活を侵しあいながら生活している。

昆虫の生活本能が、どんなにみごとであるかは、有名なファブル昆虫記にもよく書かれているが、その後、フリッシュなど多くの昆虫学者によって、ときあかさされた昆虫生活の謎はもっと素晴らしい。ミツバチの女王がからだから分泌したフ

エロモンを浴びると、同じメスである仲間、産卵能力を失ったハタラキバチになって、一生、ミツバチ社会の維持のために労力奉仕することになる。女王が死んで、フェロモンの抑止力がなくなると、ハタラキバチの仲間から産卵能力のある女王代行が現われてくるという話。

このようなハタラキバチが、蛹からかえったその日から、巢の掃除、蛆に対する給餌、巢の設営、巢の温度調節、それから入口の歩哨、そして戸外での花粉や蜜の採集と、定まったスケジュールにしたがって仕事を覚えていくという話。戸外で花粉や蜜のありかを発見したときに、巢に帰ったハチどもが、ダンスをしながら、仲間にそれらまでの距離と方向を伝える話など、全く目を見るような話ばかりである。そしてこのような行動は、われわれが本能とよぶにふさわしいもので、生まれつき持って生まれた知恵である。

これに比べると、ヒトの子はどうであ

ろうか。ハチの子のように、生まれたその日から、掃除をしたり、蛆に餌をやったりなど思いもよらないことである。むしろ親の方が、からだを洗ってやったり、乳をのませたり、スプーンで口に食べ物をはこんでやらねばならない。チンパンジーやニホンサルなどの、まことにショッキングな話では、親なし子を親にまで育ててやっても、この親は子どもの目をつついたり、赤ん坊を逆さに抱いたり、床の上にほうりだしたりするという。サル類でもそうである。ヒトの子では一層そうであろう。親がなくても子は育つというのは、負け惜しみの言葉にすぎない。ヒトの子には、ハチの子のように生まれながらの知恵は、影をひそめて現われない。これがいかにも天衣無縫なのは、このような捨て身の態度によるのであろう。

○

生命がはじめて海中で組み立てられて

何十億年、その名残りを今でも血液のなかにおきめたまま、陸上生活をはじめて何十億年、ヒトの祖先はかつて森の中に平安を求め、そして原野に出て五千万年、その道すじを通して、進化の袋小路をたぐみに避けることをえたが、そのかわりにヒト類は天衣無縫なヒトの子を授けられた。この天衣無縫さは、ヒト類にとって何を意味するものであろうか。

この子はハチの子とちがって、生まれるときの働き者ではなく、そのなかには、本能の痕跡もうすらいでいる。これを利用して、ヒトの親はときに途方にくれる。しかし、過去でもそうであったように、これからの永い進化の道をたどるために、この無縫さは、うちに可能性をかくし持っている、と信じては思いません。この天衣無縫さを大切にしてやりたいと願っている。

(元お茶の水女子大学学長・生物学専攻)